



介護保険アラカルト

利用サービスについて

介護保険制度では、住み慣れた自宅で複数のサービスを組み合わせる「在宅サービス」と、24時間の専門的な介護が必要な人のために施設などに入所して受ける「施設サービス」があります。

要介護認定で要介護1～5に判定された人は在宅サービス、施設サービスからそれぞれの状態や希望に合ったサービスを選択し利用することとなります。

要支援と判定された人は在宅サービスのみの利用となり、施設サービスは受けられません。これは状態の悪化を防ぎ、自立した生活の継続を目的とする予防給付となっているからです。

介護保険で利用できるサービス一覧

在宅サービス 1割は自己負担

- ①訪問介護（ホームヘルプ）
ホームヘルパーによる身の回りの世話や家事援助
- ②訪問入浴介護
移動可能な風呂や巡回入浴車で家庭を訪問
- ③訪問看護
看護婦や保健婦が家庭を訪問して診療補助
- ④訪問リハビリテーション
家庭を訪問してのリハビリ指導
- ⑤居宅療養管理指導
医師、歯科医師、薬剤師が家庭を訪問して療養指導
- ⑥通所介護（デイサービス）
施設に通っての入浴・食事、あるいは機能訓練
- ⑦通所リハビリテーション
老人保健施設や病院等に通って受ける機能訓練
- ⑧福祉用具貸与（レンタル）
特殊ベッドや車椅子等の福祉用具の貸し出し
- ⑨短期入所生活介護（福祉施設のショートステイ）
特別養護老人ホーム等で日常生活上の世話を受ける
- ⑩短期入所療養介護（医療施設のショートステイ）
老人保健施設等で医学的な管理のもとに介護、機能訓練、あるいは治療を受ける
- ⑪痴呆対応型共同生活介護（グループホーム）
痴呆性高齢者が数人で共同生活を送しながら介護、あるいは機能訓練を受ける
- ⑫特定施設入所者生活介護
有料老人ホーム等の施設に入所している人に、施設が提供する介護や機能訓練
- ⑬居宅介護福祉用具購入費
レンタルになじまない排泄や入浴のための福祉用具の購入費支給
- ⑭居宅介護住宅改修費
手すり取り付け、段差解消等の小規模な住宅改修
- ⑮居宅介護サービス計画費
ケアプラン作成費用は自己負担なしの全額支給

施設サービス 1割と食費は自己負担

- ①特別養護老人ホーム
常時介護が必要で、自宅での生活が困難な人の入居施設
- ②介護老人保健施設
病状が安定した人に医療ケアと生活サービスを提供する施設
- ③療養型の病院
急性期の治療を終えた人のための医療施設（療養型病床群など）



ふる里物語 町史編さんだより 55

建部庄助尚行の墓碑

（横越町指定文化財）

いなほ公園（横越中）に、江戸時代の新発田藩蒲原横越組大庄屋であった建部庄助尚行の墓碑が建っています。そこには墓誌銘があり、嘉永4年（1851）9月に国学者の鈴木重胤が書いたものです。今回は幕末の思想界と鈴木重胤という人物について考えます。

日本には、神道、仏教、儒教とそれぞれ質の違う思想があり

ました。仏教と儒教は、いうまでもなく外来思想ですが、古来「和を以て貴しとなす」（聖徳太子「十七条憲法」）で融合して受け入れ、都合のよい点を信じてきました。

江戸幕府は儒教を学問とし、全国民に仏教を帰属させました（寺院の戸籍証明）。儒教は中国の孔子の教えですが、幕府が特に擁護した朱子学のほか、仁斎

中国の古典研究が盛行すると、対抗的に日本の古典（古事記や日本書記、万葉集など）研究も盛んになりました。それは日本固有の思想、精神を明らかにしようとするもので、現在の国文学とは動機・方法からして違うものです。荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤を「国学四大」といいます。19世紀に入り、外国船がしばしば出没するようになると、国学は皇国史観として現実の政治思想性を帯び、神道が盛んになりました。

和歌の師匠をしながら平田篤胤の著書を愛読していました。篤胤が江戸から秋田に隠退すると、直接教えを乞うため北陸道を通じて越後に入り、新津の桂菅正家（新発田藩新津組大庄屋）に泊まりました。重胤は幕末屈指の才人です。彼が秋田に着いたときは、すでに篤胤が没して五十日祭のさなかでしたが、その後新津の桂家（門人の菅重は越後で屈指の国学者です）、横越の建部家、新発田の諏訪神社、畠山家などにしばしば滞在して、国学を講義しました。

この建部庄助尚行の墓碑を読んだ、日本古来の言葉に挑戦してみたいかでしょうか。なお、尚行は近代社会学の国学者建部遷悟博士の祖父にあたります。（近世部会 帆刈喜久男）

厚志に感謝

（南）今井保険サービス（代表取締役 今井源吾さん）より、同社設立30周年を記念し、また、町の交通安全指導に役立ててほしいと、30万円の寄付がありました。大変ありがとうございました。なお、町では交通安全教材のダミー人形の購入を予定しています。

短歌

（公募作品）

いち面に木々の匂ひがたゞよいて頭の上に若葉繁れり
たまたまに手など触れつつ添ひ歩む肝胆満ちし宇治橋の上
新緑に椿しやくなげ色添えて和らぐ日射し小さき庭に
若葉萌え桜は白く色褪せて散るだけ散れと手をさしのべて
風に乗り川をも越える街宣の激しき声す隣接の町
日航機沖繩目ざす窓の下雲海清く陽は燦燦と
古里の母なる河に帰り来て産卵終えし鮎流れゆく
此の辺り去年育てし青紫蘇の双葉となりて一面に生ゆ
長靴は老の足には重くして地下足袋に替え煙作励む
静かなり朝の空気を振るわせて里に降り来た鶯鳴きぬ

佐藤 安衛
中村 チヨイ
小川 トキイ
中田 マツノ
高橋 一夫
清田 ミイ
清田 タケノ
伊藤 雅美
渋谷 吉作



嘉永年4 (1851) 建立の建部庄助尚行墓碑
(高さ120cm、幅54cm)